

青田川讃歌

通安市 岡村博己(大町二丁目出身)

高田に帰るといつも散策する場所があります。大きな桜の並木がある青田川の辺りです。

関川に流れる青田川をさかのぼると、我が家の裏(大町通りの始め)で東に九十九度曲がり、三百メートル程上ると(南本町三丁目の始め)今度は南に九十度曲がって南本町二丁目と平行して南葉山の麓へと向かいます。江戸時代の外堀を利用して作られた用水路と聞いております。



六月の産卵期には大きな鮎(ふな)とハヤがたくさん釣れましたし、銀トンボの宝庫でもありました。我が家の裏では水深一メートル程ですが、昔の陸軍病院(今の国立高田病院裏あたり)から水が淀むことなく清流となります。此処では、魚の動きが見え投網でハヤを取ります。

面白い事にこの辺で、青田川の下を土管で横切る幅四メートル程の用水路(南本町小学校の裏を流れる川)に「鮎(あゆ)が群がって回遊しておりました。「投網」か「引つ掛け」という特別な錨(いかり)型の針で魚が針の上に来た時引っ掛けて取ります。

或る雨上がりの日、魚屋の友達が遊びに来たので、私の投網の腕前を見せてやろうと連れ出しました。川が濁っていて魚影は見えませんが、秘密のポイントで数匹取りました。こんな所に「鮎」がいる

とはとビックリしていましたが、一匹百円で売れると云って持つて帰りました。まだ鮎代は貰っていません。昭和三十年頃の農業のない時代でのお話です。

堰(せき)止めて田んぼに取り入れていた水が不要となる頃の日曜日(二百十日頃)に、毎年「堰払い」といって三つある堰を上げます。すると、この時何千という人が網を持って浅くなった川に入り魚をとります。鮎、ハヤ、鯉、鯉(なます)が中心です。毎年同じ漁獲高です。この繁殖を支える「青田川」はすばらしい驚異でした。

用水路としての「青田川」は、役目を終えて今は水が少ししかありません。願わくは、背の低い堰をたくさん作り、一メートルほどの深さでたえず流れる川にして欲しいものです。きつと魚やメダカ、トンボが戻ってきます。ホタルも甦るでしょう。そして子供達が水遊びのできる美しい川にして欲しいものです。

